

Akeda Koshi Photo Exhibition

追悼写真展

昨年の夏、ひとりの写真家が旅立った。
彼は平和を願い、家族を愛し、仲間を大切にした。
ひたむきに撮りつづけた膨大な記録は
あの日へと誘い、語り、微笑みかける。
彼が出逢った瀬戸の原風景や人々の笑顔は
時を越えて輝きつづけるだろう。

写真家

明田弘司の 昭和

2016年9月8日(木)～10月16日(日)

10時～17時(入館は16時30分まで) [休館日] 月曜日(祝日9月19日・10月10日は開館)

公益財団法人泉美術館

エクスセル本店5階
広島市西区商工センター12-3-1
TEL 082-276-2600

入館料 一般 300円 学生及び18歳未満・65歳以上 無料

(学生証または年齢確認できるものを提示下さい)



明田は、なぜか子どもに警戒心を抱かせない写真家だった
1954年(昭和29年)11月17日 矢野町

公益財団法人

泉美術館



人待ち顔で並んで立つ、ポストとおじさん。
昭和30年代 呉市

明田弘司が 愛した ひと・街・暮らし



平和大橋には、霧が似合う。明田は、よくここに足を運んだ。
1956年(昭和31年)頃 広島市



Profile
明田弘司 あけだ こうし
1922-2015

呉市生まれ。戦時中、中国で軍属として写真の仕事に従事。敗戦2カ月後に帰国。1952年、名取洋之助氏から「広島市は原爆で焼き尽くされた。復興に何年かかるかわからないが、それを記録しなさい」と教えを受け、すぐに撮影を始めた。写真店を営みつつ、立ち上がる街と市民の暮らしを撮り続けた。5万枚を超える写真を遺し、2015年夏、戦後70年の節目に逝去。



お兄ちゃんや、お姉ちゃんが下の子の子守するのはあたりまえのことだった。二人の眼差しがかわいい。
1958年(昭和33年) 尾道市

写真家、明田弘司。
彼は写真店を営みながら、心の赴くまま復興していく街や人々の暮らしを撮りつづけた。
子どもは無邪気に笑い、大人は気取らずさりげない日常の顔を見せている。
彼が遺した5万枚を超える写真は永遠に私たちに語りかけ、心を揺さぶりつづけてゆく。



船上で管絃祭を待つ家族。
当時の管絃祭は周辺の島から多くの船が集まっていた。
1955年(昭和30年)8月4日 廿日市宮島

明田は自ら、路地専(路地専門の写真家)と言った。
ここには人びとの懐かしい生活が満ちていた。
1958年(昭和33年)3月2日 尾道市



主催／公益財団法人泉美術館・中国新聞社
協力／NPO法人広島写真保存活用の会
後援／広島県教育委員会・広島市・広島市教育委員会・NHK広島放送局・中国放送・広島テレビ・広島ホームテレビ
テレビ新広島・広島エフエム放送・FMちゅービー76.6MHz



公益財団法人

泉美術館

牡蠣打ち場のそばに積まれた牡蠣殻の山。
子どもたちは飛行機を飛ばして遊んでいる。
1956年(昭和31年)11月11日

